

子ども主体の保育で 持続可能な園へ

後編

4月号では、秋田喜代美先生をお招きした対談(4月号・P6~)で「子どもまんなか社会」の園のあり方、保育のあり方を確認し、併せて、実践トライ&エラー「わたしの園の変革への道」(同・P10~)、リーダー座談会「6人のリーダーによる『持続可能な園』への本気の取り組み」(同・P16~)で、リーダーたちの変革へのプロセスを紹介しました。6月号では、そのリーダーたちが抱く、将来に向けての園経営ビジョンを紹介し、ます。紆余曲折を経て、リーダーたちはどんな決断を行ったのでしょうか。



Contents

Part 4 リーダー座談会
3年後、どう考えていますか? …P.11
 ~6人の園のリーダーの語りから見えてくる保育の近未来~
 大豆生田啓友、戸巻 聖、加藤泰和、安家 力、横山和明、上田理恵、中戸華恵

Part 5 事例紹介
子ども主体の保育への園改革 …P.16
 ・平塚保育園 ・あけほのほりえこども園 ・別海くるみ幼稚園
 ・学校法人くるみ学園 ・めぐみこども園 ・社会福祉法人 協愛福祉会

Part 4

リーダー座談会

3年後、どう考えていますか? 〜6人の園のリーダーの語りから見えてくる保育の近未来〜



社会福祉法人 協愛福祉会 **横山和明** (よこやま かずあき)

平塚保育園 **上田理恵** (うえだ りえ)

めぐみこども園 **中戸華恵** (なかと はなえ)

別海くるみ幼稚園 **加藤泰和** (かとう たいわ)

学校法人くるみ学園 **戸巻 聖** (とまき ひじり)

玉川大学 **大豆生田啓友** (おおまめうだひろとも)

あけほのほりえこども園 **安家 力** (あけ ちから)

はじめに

今、保育業界は大きな変革期にさしかかっているのはご存じだと思います。子どもの数が減少し、子どもまんなか社会に向けてどう対応していくか。いくつもの課題に対応しながら、今後、保育の質を高めることと園経営を両立させていくことは、すべての園にとって大きなテ

大豆生田啓友先生以下、大豆生田…

この6月号では、中期ビジョンというところで、これから3年から5年ぐらい先に向けて、どんな園をつくっていきたくて、どんな園をつくっていきたくて考えているかががっていければと思います。まず、戸巻先生、いかがでしょうか。

大豆生田啓友

マになると思います。

4月号では、6人のリーダーがこれまでにどう改革されてこられたか、そこでの課題がどこにあったかを中心にお話を聞かせていただきました。この6月号では、中期ビジョンをテーマにこれから3〜5年先、園をどうしていくつもりかがありました。

「もうせねば」「もうすべき」からの解放を

戸巻先生(以下、戸巻)…はい。今、園全体に、こんなことをやったら

保護者に怒られちゃうんじゃないか、上司に怒られちゃうんじゃないか、来年度の園児募集に響くんじやないかといった、何かを恐れて過ごしている姿が見られます。まず5年間くらいかけてそれをやめていこうと保育者たちと話をしていきます。

保育者たちと話すと、認定こども園、幼稚園、保育園はこうあるべきというのがすごくあるように感じます。責任感からなのか、世間の目が気になるのか。僕らの勝手な思い込みかもしれないけれど、何かしらがらみのようなものかもしれません。児童福祉法にも子ども子育て支援法にも書いてないけど、何かこうでなければいけないというのがある。

5年後には、子どもたちとそこに集う人たちの思いや願いを実現させるために、縛りが無い園を目指したい。保育では地域の中核的な立ち位置を担いながらも、地域の人、子ども、保護者の思いや願

いだけでなく、職員の思いや願いも叶えることができる園を目指したいです。

大豆生田：「こうせねば」「こうすべき」からの解放ですね。それが保育業界を苦しめている部分は大きいように思います。

規模拡大から 質向上へ

加藤先生(以下、加藤)：ここ数年で、うちの園でも園児の減少を実感するようになりました。職員会議でも「園長先生、来年の募集はどうですか」と心配そうに聞かれます。話をする時、マイナス面ばかり捉えるのでなく前に進むにはどうするかという話になると、これまで園の規模拡大の話題になっていました。

でも、3歳以上の子どもの定員が埋まらなくなってきた現状から、拡大ではなく充実する方向でということになりました。子どもが少

なくなつた分、園のスペースに余裕ができた。また、世帯数も減つてくると、保護者ともっと密につながっていきける。それから、多機能化の視点をもって、これまで自分たちがあまり積極的に取り組めていなかったところを、どこまでできるのかをしっかりと考え、戦略的によの部分を厚くしていくか考えたほうがいいねと話しています。例えば、

支援が必要なお子さんの保育、病児や体調不良児、産前産後の支援などです。その流れで、児童発達支援管理責任者の資格を取ってくれる人を募ったところ、2人が手を挙げてくれました。今までは、外部の児童デイサービスや児童発達支援事業所を活用してきたけれど、できれば自分たちが専門的な知識を得て、育ちを保障できる体制を作りたいと保育者たちが



言ってくれたのです。どうやって「充実」につなげていけるかを考えています。

大豆生田：人口減少時代には、園と同時に町・地域の持続可能性の話はセットで考えざるをえないと思います。その中で、子どもの数

が減ったことを逆手にとつて、質や関係性をより充実させることや、多機能化によって、地域での園の役割を確立していくことは、大きなテーマになると思います。

妊婦さんから 小学校まで

安家先生(以下、安家)：私も順序立ててやっていかなければいけないと思っていて、コロナでうまく進められていなかったんですけど、今年から地域向けの子育てカフェをスタートしました。申込制で、

未就園家庭もしくは妊婦さんが対象です。園の給食で使っている無農薬野菜で作った食事を、パートの保育者がサーブして一緒に食べるのです。園のご飯のおいしさを知っていただくという地域へのアプローチです。ありがたいことに毎回たくさん予約をいただいています。未就園の子どもたちとの接点としても、園庭開放などいろ

んな地域支援、子育て支援のメニューは用意しています。

また、加藤先生のお話にあった療育の面言えば、うちは在園児の15%ぐらいが、診断がついていたり手帳を持っていたりする子どもたちです。日頃、療育と園生活をセットにしてその子たちが伸びていく姿を感じていることから、そこも自分たちで担っていくべきだろうと考え、児童発達支援事業所開設を準備しています。

それから、卒園した子どもたちが園とつながり続けられるよう、主に、小学校の創立記念日や土曜授業の振り替え休みの日などに「小学生先生」として園に来てもらっています。今日も5人ぐらい来ていました。

そういう中で、保護者の方からは「小学校をつくるべきなのは？」というお声をいただいています。中期のビジョンとしては、妊婦さんから小学生までの教育を広く担い、チャンスがあれば義務教育最

後の中学校までの教育を担えればと考えています。質の高い保育を提供できるための努力は続けつつ、小学校の設立がテーマになると思っています。

大豆生田：こどもでも誰でも通園制度(仮称)なども始まれば、保育は新しいフェーズに入ります。まさに園が地域の親子の拠点になっていくというイメージです。カフェの話もありましたが、日本の園が世界に誇れることの1つが「食」です。その食が、地域の拠点づくりで大きな役割を担うかもしれませんね。

それから、インクルーシブ保育について。今後、多くの園で多様な子どもを受け入れるようになれば、それまでどんな保育をしてきた園なのかがそこで問われるだろうと思います。

「小学生先生」の話題もありました。小学校とのつながりでいえば、「幼小の架け橋プログラム」も関連してきます。優れた幼児教育・保育は今後の学校教育のモデルにな

っていくことが予想されるなか、園が学校をつくっていくというのはこれから出てくる形かもしれない。

人づくり、 まちづくり、 役割分担

横山先生(以下、横山)：これからの自園の経営ビジョンにつながるのですが、自分が子どもの頃、これほど子どもの主体性で言っていたのかなと。昔は、園でも園から帰っても、毎日自由に、好きなように遊んでいました。でも今は社会が変わって、子どもたちが自由に、主体的にできる場所が少なくなっているんじゃないか。そう考えた時、それができる場所を自分たちがつくるべきなのかなと思つたのです。社会を変えるのは難しい。でも、今、自分たちができることを園でやりつつ、どうやって社会と結び付けていけるか考え

ることが必要と思っています。

これからの経営ビジョンとしては、園で子どもたちの人づくりにかかわる部分と、法人としてまちづくりにつながる部分がある。できることからやっていけば、町そのものが変わるんじゃないかという思いがあります。

大豆生田…これまで地域が担っていた役割のかなりの部分を園が期待されることになるだろうと思います。その際、個々の園でできることとネットワークでできることを分けて考えるのかなと思いますね。

園の外へ

上田先生(以下、上田)…私は、保育そのものの質についての話になりますが、ここ3年ぐらいを目安にして、地域にもっと入り込んでいく保育をしたいと思っています。今までもずっと、園内ですべてを完結させようとする考え方で保育が進んできていた感じがしています。

校の保育体験「小さな弟や妹の世話をしてみよう」という2つで、だいたい9割でした。圧倒的です。学生時代からの小さな子どもとの接点がいかに大事かということですよ。それから人材の多様性については、これまで子育てにかかわらなかつたような人をどう巻き込めるかも課題です。

今後の心構えとして

横山…一つ、うかがいたいことがあります。人口減少のおおりは、よほどの地域でないかぎりここ数年で必ず出てくると思うんです。逆に、3年後、5年後の危機を踏まえた考え方みたいなありませんか。

大豆生田…これは地域差が大きいですよ。まだ待機児童がいる地域もあるし。

横山…働き方改革などを見れば、これからは0歳児に頼らない運営が大事になりますよね。うちはま

ここにきて保育者も子どもも主体的な保育を進めていこうとなってきたことで、まず、保育者を何人か連れて、いろいろと外に出向くようになりまして。そうしたら保

育への良い影響が大きくて。今後、地域にどんどん出ていって保育に活かせる材料を探したいと考えています。また、子どもたちについても、もつと地域に溶け込んで、地域の人たちと一緒に進められるようにしたいです。外部の力を取り入れながら、地域にもつと園のことを知っていただけるようにしていきたいという思いがあります。

大豆生田…これまで、学びの材料を園の中だけで集めようとしている園は多かったんです。でも、町に出れば、保育の材料はいくらでもあると私はかねがね言っていました。町は学びの資源の1つです。併せて、地域の人をどう巻き込んでいけるかを考えていくことが大切ですね。

だんだんとかやっていけていますが、ここ10年で宮崎もかなり子どもの数が減ってきています。定員のスムーズな見直しなども考えていかなければいけないのかなと思っています。

安家…うちは園をつくる時、拡大のイメージはこれで最後だと思つと理事長に伝え、時間が経てば畳み方を考えなければいけないと思つともいいました。地域で必要になる施設が限られてくる中、生き残るための努力も必要だけど潔く畳んで整理していくイメージもつていないと、とは言っていますね。

大豆生田…これからの働き方改革や育休取得などに対応した園のあり方を考える必要もあります。今後、園の合併や統合みたいなことも大きなテーマになる気がしますね。

加藤…別海町は面積が大阪府の85%ぐらいあって、人口が1万5,000人しかない。ちっちゃい集落が点在し、あとは牛しかない町です。園を残したいという地域の思いもあるので、今後、競争し

子ども主体の保育を地域へ浸透

中戸先生(以下、中戸)…うちの園の場合、まず、子ども主体の保育にしたことで、子どもの育ちや遊びに興味・関心をもってくれる保護者の方が多くなってきたと感じています。それは、未就園児の保護者の方もです。未就園児のお母さんの場合、核家族や単身赴任家族の方も多くいます。園のひろばに遊びに来られるお母さんには、1人で子育てする不安を抱えている方が多いように感じます。リフレッシュできる場づくりや子ども食堂など子どもを介して保護者同士がコミュニケーションをとれる場をつくることは大事だと思います。

また、小さい頃から保育の仕事を経験することの大事さを感じています。例えば、小学校のまち探検、中学校の職場体験と交流、高校生

ないようにやっていくしかないと思つています。今、隣の園長先生などにも声を掛けて、行政も巻き込みながら、地域の保育ビジョンをどうするか話を進めています。

横山…園はまちにとって必要な施設だと思つので、我々も行政と手を組んでいかなければいけない部分がある。行政にも園の必要性をもつと理解してもらってやっていくことが大事なんです。

戸巻…僕もそう思っています。実は今、とあるエリアで行政と一緒にやって認定子ども園の運営に挑戦しようとしています。年間の出生数は100に満たない所です。市内には幼稚園が1園しかない。そこを認定子ども園化して、どうやって施設を維持していかけるかやってみようとしています。民と公が手を組んで子育てするモデルケースにしていきたい

のボランティア活動、大学生の保育実習など、保育にかかわる機会もつて、実は結構多いのです。うちにも中学校の職場体験で憧れをもち、保育の道に進んだという保育者が数人います。人材不足が言われますが、「保育の楽しさ」をしつかり伝えていくことも大事だと思います。また、人材を多様化させるために、保育や子育て経験のある65歳以上の方を採用しています。いろいろな方を巻き込みつなげていって、園を盛り上げていきたいと考えています。

大豆生田…乳幼児期に大事なことは、お勉強のための幼児教室的なものではないということが明らかになりつつありますよね。園が子ども主体の保育のモデルを示しながら、その魅力を感じてもらえるような戦略を打ち出すことは重要です。それから、人材について。

これは玉川大学・乳幼児発達学科の学生に聞いたのですが、この学科を選んだきっかけは、「中学・高

たいですね。お互いのノウハウやお金の部分も見てもらいながら、着地点を協議していくことはすごく大事だと思つて取り組んでいます。

大豆生田…もう、拡大の時代ではないはずなので、そういうことも含めて新しい時代だと言えますね。



物的環境 ポイント＝
アトリエ

- 子ども主体の保育、地域に開かれた保育を実践するためにはまず、自身を含め、保育者の考え方、思想を変えなければと思った。
- 考えは、創造性、想像力の発展へ向かう。環境設定への思いが生まれ、子どもたちが自由な発想や想像力を高められる場所としてのアトリエの必要性に思い至る。
- 活動を通じ、自然物などをアトリエの素材に取り入れることは、自ずと園外とのかかわりが重要になることに気付く。そこから、外遊びと散歩の充実が目標に。まさに、社会とのかかわりを大事にする「散歩」の思想へ。

工作用具や、自然物を含むいろいろな素材を揃えていくことで、アトリエは子どもたちがアイデアを表現するアートの空間に。

基本的には、年齢別の構成だが、好きな場所で好きな遊びを展開することで、年齢に関係なくかかわり、遊び込める。



大豆生田啓友先生から

「幼児期までのこどもの育ちに係る基本的なビジョン」では「バイオサイコソーシャル」な観点で良い状態、幸せな状態が続くことがウェルビーイングにつながるとあり、身体、心、社会環境が一体的に考えられるようになってきていますね。美術館などアートの癒しとウェルビーイングのつながりについて言われることもありますし、STEAM教育では科学性の中にアートが含まれています。アートは重要な視点になるでしょう。また、今後一層、多様な人々がかかわり合う社会になっていきます。子ども同士のかかわりを促すためには、周辺にいる大人の間人間関係が良くなければ進みません。「こどもまんか」を考えた時、子どもたちが環境を選べることをどう保障できるかも大事になりますね。



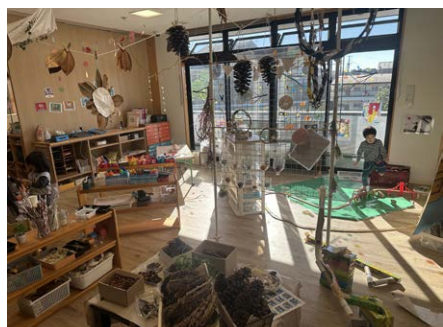
事例 6

社会福祉法人
協愛福祉会

理事長
横山和明先生



【園情報】
法人：社会福祉法人協愛福祉会
園種：保育園、認定こども園が5園。児童クラブ4施設。
所在地：宮崎県宮崎市（法人本部）。1年を通じて温暖な気候で、周囲は自然が多く、海まで車で7～8分。風光明媚な観光地として発展している。
設立：1975年 職員数：160名



人的環境 ポイント＝
保育者の変化

- 人的環境という思い浮かべたのは「保育者」のこと。「子どもたちが好きな遊びを選択するようになった」「自分で考えて遊びを展開できるようになった」のは、保育者のかかわりがあったからこその変化。
- 例えば、ごみ拾いが好きだった子どもたちが、その大事さを伝えるため、まず保護者の前でプレゼンした。その後、もっと大勢に向けて発信するべく、ポスターを作成した。
- 子どもたちを取り巻く人的環境が変われば、それに応じて物的環境が変わっていく。いろいろなことが自然に子ども主体になっていく。この変化はいずれ、広く周辺地域にも広がっていくだろう。

物的環境 ポイント＝
子どもの姿をベースとした
ICT活用

- “ここぞ！”という時のICTの活用”で、保育が深まり、つながった。踊りに興味をもった5歳児クラスがいろいろな踊りを探すなかで沖縄のエイサーを見つけた。活動が盛り上がり、子どもとくり返し対話をして、沖縄の園とzoomをつないでの交流が始まった。手紙の交換などから、沖縄の自然や食文化へ関心が広がり、オンラインクッキングも行った。
- 和太鼓への関心を高めていた4歳児クラスの担任が、5歳児の活動内容を聞き、近くの大学生に声をかけて、演奏を披露してもらうことに。
- 実物にふれて楽しむ機会と併せて、たくさんの和太鼓を用いた生演奏をzoomで配信してもらう。刺激を受けた子どもたちから発表会で和太鼓遊びを披露したいという声があがり、取り組みのための環境を設定。小さい子どもでも遊びが広がり、深まっている。

園児が行うサークルタイムを見た小学5年生が、自分たちも参加してみたいと一緒にいった時の様子。園児も小学生もみんながワクワク。



大豆生田啓友先生から

ICTを子どもに活用する際には、良いか悪いかでなく、どう使うと有効かを考えることが大事です。例えば、実際に対面できない時にはICTを使い、そのことが、実際に対面した際の活動を盛り上げることに繋がるとか、実践が豊かになるために使うという視点が大事です。また、小学生との交流は「架け橋」にもつながってきますが、これはまだ地域差が大きい印象です。小学校との交流は、これまで年長児以外は受け身であることが多かった気がします。この事例は一歩進んでいますね。主体的・対話的で深い学び、個別最適な学び、協働的な学びと言われるものは、幼児教育・保育では当たり前の原理です。どう小学校と対話の場をつくり、そのことを伝えていけるのか。園側の主体性が求められる時代になっているのかもしれない。



事例 5

めぐみこども園

園長
中戸華恵先生



【園情報】
法人：社会福祉法人めぐみこども園
園種：幼保連携型認定こども園
所在地：福井県福井市。園は県庁所在地の福井市中心部から車で15分ほど。山と川に囲まれた自然豊かな立地。
設立：1969年。2015年認定こども園移行。
利用定員：175名 職員数：60名



配信を見る3歳児たち。これをきっかけに遊びが盛り上がり、その後、録画した映像をくり返し見て楽しんでた。

人的環境 ポイント＝
ワクワクする
数々の交流

- ある3歳児の声から始まった遊びがクラス全体に広がり、まず、地域の小学校との交流につながった。その後、新たに5歳児も巻き込んだ交流へ発展。国語の特別活動での絵本の読み聞かせにまでつながった。
- 「園内の活動だけでは、子どもたちのチャレンジ精神を刺激するのに限界がある」と感じていた5歳児担任が、園外に一步踏み出すことで、「子どもたちの遊びの意欲の高まりを感じた」と地域交流のおもしろさを実感している。
- 子どもたちの活動を見た校長先生が、「これまでの行事の考え方が変わった」と教えてくれた。もっと地域とのつながりを活かすために人的環境の土台をつくっていきたい。